

## 要旨

2006年4月にソロモン諸島の首都ホニアラで首相選挙をきっかけに暴動が起き、華人の経営する商店が襲われて略奪、放火の被害にあった。この暴動により、ホニアラにある商業施設の4分の1が破壊され、当時現地にいた約3000人の華人はほとんどが中国に避難する事態となった。

この暴動の原因として「ナショナリズムの萌芽」「華人が政治に介入していることへの不満」「経済を掌握していることへの不満」が指摘されている（古澤、小川、石森 2006：Allen 2008）。また、Willmottは、「新移民は早く儲けたいと思っているだけで長い時間をかけて太平洋の文化を勉強した経験が無いことがソロモン人を怒らせた」と、新移民のふるまいがソロモン人の不満をつのらせたと論じている（Willmott 2008）。

ソロモン諸島でおこなった華人商店での参与観察と華人労働者へのインタビューを分析した結果、ホニアラ騒乱は、華人の政治的あるいは経済的な活動に対する不満に加えWillmottが指摘するように、華人の日常的なふるまい方がひきおこしたものであるとも考えられることが分かった。またWillmottが指摘する新・旧移民の区別よりも重要なファクターがあることが判明した。ホニアラ騒乱ではチャイナタウンが無差別に襲撃されたのでも、新移民だけが被害にあったのでもない。華人商店経営者にソロモン人の友人がいることが、焼き討ちの被害を免れた店の共通点であった。一方で、経営者の滞在目的の違いが、被害後の方向性を決定づけている。

調査によってソロモン諸島における華人は、〈旧移民〉〈新移民経営者 永住志向〉〈新移民経営者 帰国志向〉〈パートタイム労働者〉〈不在の経営者〉に分けることができた、それぞれのグループには、ソロモンでの生活、ソロモン人との関わり方に大きな違いがある。

このことから、「新移民」といっても一括りにできるものではないといえる。また、それぞれのグループによってソロモン人に対する接し方や考え方も異なっていた。このことから華人を理解するためには、時代区分だけではなく、回帰傾向や雇用関係も視点に入れて傾向を考えなければならないことが分かる。

調査における分類の中で〈パートタイム労働者〉〈不在の経営者〉など、これまでの華人労働者に当てはまらない新しい移民が多数いることが判明した。〈不在の経営者〉は、中国とソロモン諸島を頻繁に行き来し、ソロモンに店舗をもっているにも関わらず、ソロモンにいる時間が短い。その〈不在の経営者〉によって雇われているのが、〈パートタイム労働者〉であった。

〈パートタイム労働者〉は、交通手段と通信手段の発展というグローバル化によってこれまでの移民とは異なり、ソロモン諸島で働くことを、身近な職業選択の一つとして選んでいる。彼らは、ほとんど休みがないこと、給料が中国の口座に振り込まれること、縁故採用のため、店の中に同郷出身者が多いことなどの理由から、ソロモン諸島に住んでいながらほとんどソロモン社会に関わらずに生きている。金儲けに走ることも、店をもつこと

もない。そのため、かれらは非常に可視化されにくい、顔の見えない隣人として存在するのである。